

精神分析のはなし 第10話

JAM：分析の終わりについて。

ひとりの分析主体が、分析からすべてを得たと考えていると、想像してみましょう。期待していたものすべてを得たのだ、つまり症状にもう悩まないというだけではなく、人生のシナリオのなかで繰り返し演じていた役割から解き放たれたのだと、幻想とよばれるよく知ったシナリオから解き放たれ、もうそれに振り回されていない、と考えていると、想像してみてください。

そのとき分析主体は、ほかの人たちから自分の分析が終わったという確信が認められることを望んだり、とりわけ、精神分析をみずからも実践したいと望むかもしれません。では、だれによって、分析が終わったことは、認められ得るのでしょうか。分析が確かに終わったのだと、誰に認めてもらうのでしょうか。その点について意見をるのは、分析家、その分析主体の分析家の役割では、本当はないでしょう。自分の分析家は、ある種それを留保するものです。

分析の組織のなかに、委員会とか審査会があって、実際にはその分析主体を受け入れる可能性があります。本当に分析経験を最後までやったと考えるこの分析主体を、受け入れる可能性があります。

しかし、そうですね。審査員というのは、つねに聞こうとするものです。この分析主体は年輩者や上司に自分のケースを語りに行くのではなく、その逆です。下の人たち、つまり、分析主体らに対して、語るのです。彼らは分析を終えていない人たちで、まだ分析中であり、分析を終えることについて問い合わせている人たちです。

彼らは感光板であると想定されていて、分析主体が語ったディスクールから感じ取ったことを、まさにひとりの審査員に伝えるでしょう。したがって、これらの分析の行き止まりを乗り越えたと考える者のことを、こういう理由で「渡る人 *le passant* (パスする人、通る人)」と呼び、渡る人は、「渡らせる人 *le passeur* (パスする人の証言を聞く人、通らせる人。彼ら自身もパスの候補生になるだろう人)」に会いに行きます。そして渡らせる人が、経験のある分析家たちからなる審査会で、そのケースを報告するのです。

ということは、実のところ、分析主体=渡る人は、渡らせる人と何回かのセッションをし、

渡らせる人のひとりが、渡る人の数百、何千回もの分析のセッションについて証言する、ということになるのです。そしてこの渡らせる人は、その要点、いちどで圧縮されたものをもたらし、二度目のチャンスはまた二番目の渡らせる人によって、いちどに与えられるのです。分析的作用のなかで、欲望、その迷宮、その複雑さをこれ以上に明らかにするものは、このプロセス、デフレ以外のなにもありません。じつは、なにかが燃え尽き、消費されて、こう言ってよければ灰だけが残るのです。

自身のケースを提示する「渡る人」は、かつての誰か、もう今はそうではない誰かについて、語ることになります。X氏から私たちが学ぶものは、原則として、もうX氏と同一人物ではなくて、むかしのX氏に関わることです。そのとき渡る人の語ることは、多くの場合、ひとつ家族の歴史のように表示されるのが確認されます。家族の一連の肖像のようなもので、ときには先祖のギャラリーによって補完されたりします。そして家族への回帰は、たしかにそのパスのプロセスによってもたらされるもので、真に生育歴への急き立てのように機能しています。逆に、分析においては、主体はしばしば、すでにその彼方にいるものです。

そして、家族史を補完する、べつの歴史が存在しています。それは分析との出会いの歴史であり、分析家との出会いの歴史、そして分析の歴史です。私は数年のあいだ、自分が属する精神分析団体の審査員のひとりでした。そこで私の胸を打ったのは、このプロセス、パスというプロセスは、主体が知らないうちに、その情熱や、シナリオ、幻想の恒常性を確認することについて、それでもやはり比類のない装置であるということでした。

私はここで、どういう人について話しましょうか・・。分析の行程が認められた人もいれば、しかしまさに分析がまだ続けられるとみなされた人や、分析が行われたとか、もう少しさらに続けるべきと思われた人とか・・。そもそもっとも示唆に富むことといえば、たぶんその分析主体が、パスのプロセス自体との関連でどう振舞うのか、その仕方でしょう。渡らせる人たちや審査員との関連で一分析主体は審査員には会いませんし、審査員と接触もはかりませんー、そして分析主体が自身のパスの成功を承認するタイトルを受け取りたいと思っている団体との関連で、どう振舞うのかというその仕方です。

私は例を挙げたいと思います。アルファ氏がいます。彼は母親が大好きな息子であり、女好きの男性であると、そんなふうに自己紹介していました。彼は子どもの頃母親の叫び声をよく聞かされていて、その叫び声は父親に向けられたものでした。彼はつねに母親の同志でした。そして、彼は生きているあいだ、つねに待ち焦がれて（せっかちで）いました。自身の分析の結果を前にしたときもそうでしたし、「夫たちはその妻たちを満たすことが不十分に

しかできない」と示すことについても、待ち焦がれていました。

つまり彼はドン・ファンで、強迫的なドン・ファンでした。じつは、どう言つたらいいのでしょうか、彼は「寝とられ夫になること」に、執着していました。それから、彼はこう言いました。「僕はそこから抜け出ました」と。「だから、ある女性が口を開いて夫の悪口を言うこと、僕がただちに彼女のために動くためであっても、それはもう僕の手には余ることです」と。彼は自分の妻を満足させるために自分を使っていました。ですからすべてはうまく行っていました。それで彼はパスの手続きに入ったのです。

しかし彼を信じることができるでしょうか？なぜ彼はパスの手続きのなかで、団体を誘惑しようとするのでしょうか？そしてなぜこんなにも審査員のあいだに、あえて言えば「そこでやすみなさい」と言う、ひとりの聖母マリアのように団体が扱われているような感覚を、生み出しているのでしょうか？

つまりはパスの手続き自体のなかで、この雑なパスの手続きのなかでこそ、まさに彼が活気づけている幻想が、告発されているのでした。その幻想から彼はまだ抜け切れていたかったのでした。

ベータの例に移りましょう。彼女は若い女性です。彼女はある壊死にまつわる辛い話を語りました。彼女自身がある意味壊死している理由は、死んだ兄への同一化が原因だと彼女は考えていました。この死んだ兄は両親の記憶、とりわけ母親の記憶につよく残っているのだということでした。そしてじつは、ごく小さい頃から彼女は、自分が愛されるために、この死んだ兄に似たいと願っていました。それで、彼女は分析をして、それも長いあいだ分析をして、生まれ変わったと思っていました。

少しづつ、死んだ兄への同一化の衣装は、はがれていきました。一歩一歩、この兄の分身であることを解体しなければなりませんでした。つまり愛情生活を制止させた、見せかけの男姓性というものと同時に、性的享楽をたえず腐敗させる死の現前とを、分析によって解体する必要がありました。そして、すべてはうまく行っていました。

そういう理由で彼女はパスの手続きにはいりました。今こそ、彼女は生きているのだ、今こそ彼女は女性として生きている、自分の女性性を引き受けていると彼女はそこで説明しまし

た。

しかしもしすべてがうまく行っているなら、なぜ彼女はそんなにも悲しそうに、抑うつ状態で、パスにやって来るのでしょうか？それは渡らせる人たちが彼女の状態を心配するほどだったのです。ずっと長い間彼女が身に着けていたしるしを、彼女は消したのでしょうか？それともただそれをカモフラージュしただけだったのでしょうか？

それでは次にガンマ氏の例を話しましょう。彼は26年のあいだ、分析をしていました。彼は3人の分析家に会っていました。彼はまったく一秒も退屈していませんでした。シニフィアンの戯れは、彼にとりもはや秘密をなしていませんでしたがしかし、彼が語り始めるやいなや、語が絶えず競いあうかのように新しい語に圧縮されたり、置き換わったりして、たえず発見がありました。それは尽きないものでしたが、しかしある日とうとう、彼は分析を終わりにしたのですが、そのことに驚いていました。

彼はどうしたのでしょうか？あまりに彼自身が驚いたので、分析をはじめて4分の1世紀が経ったところでしたが、彼はそれを知らせたいと思いました。それで団体にパスの手続きをしたいと要求したのです。そして渡らせる人ふたりとそれぞれ1回づつ彼は面接をして、終わりました。しかし、そうなのです。彼はふたたび新たな面接を渡らせる人たちに対して要求したのです。電話をかけたのです。彼はまた何かを発見したのです。渡らせる人々は、それを記録したのでしょうか？

デルタの例にいきましょう。彼女は父親と、兄弟しか愛していないと言っていました。母親と姉妹について語るとき、彼女はつねに一種の嫌悪感をにじませていました。人生のなかで、彼女は男性しか評価せずに、女性には耐えられないと思っていたのです。しかしながら、彼女は女性でした。そのことも分かっていました。それではどのように、簡単にそれらと適応できたのでしょうか？つまり彼女は苦しんでいたのです。このシナリオ、幻想は彼女を苦しめていて、それで分析を始めたのです。

分析のなかで、彼女は女性であることへの拒絶を浮かび上がらせ、少しづつ、一歩一歩、それを小さなものにしていきました。ついに彼女はべつの側へ行ったと考えました。そしてかの有名なパスを要求したのです。

偶然にも、運命のいたずらか、パス手続きのなかで、渡らせる人のひとりは男性、ひとりは女性でした。そして渡らせる人各自は審査会に報告したのですが、そのふたつの報告は互いにたいへん異なったものでした。それでデルタは男性の渡らせる人が好きで、女性の渡らせる人は嫌いなのだと、審査員たちは気がついたのでした。

それでは最後にオメガにいきましょう。彼女はつねに「ひとは自分を厄介払いしたいのだ」と考えていました。そう考える理由には事欠かず、それは彼女の幻想になっていました。つまりこの意味作用、「他者は自身を厄介払いしたい」、という、この意味作用はいつも人生のあらゆる時に存在していました。そしてつねに、彼女は自分のいる状況をそう読むようにしていました。

だから彼女は至るところから脱出 exil していました。そして苦しんだおかげで彼女はひとりの分析家のそばにとどまることができたのです。ただし簡単ではありませんでしたが。彼女がその分析家を選んだのは、その分析家自身が脱出 exil という特徴を持った人だったからでした。彼女は祖国をふたたび見いだし、結婚して夫ができて、子どもを作りました。彼女は満足して、そしてパスをしました。

しかしなぜ彼女は、団体（エコール）のなかに新しい家族を再発見したい、と、言ったのでしょうか？まだ彼女は自分を養子にする他者を探しているのです。そしておそらく彼女は今なお、つねにずっと、孤児なのです。

以上。分析の終わりの繊細さが、お分かりいただけたでしょうか。まだ完全には終わっていない分析の例をあげたようです。